

---

# 永遠は刹那のなかに      第四部

忍者猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠は刹那のなかに 第四部

### 【Nコード】

N2383P

### 【作者名】

忍者猫

### 【あらすじ】

五年前の世界、それも同盟にタイムスリップしたミッターマイヤーの物語。

コンセプトは、『銀英伝版紺碧の艦隊』。

いや、あんな奇想天外兵器は出しませんが、奇想天外親父はいま  
す。

後、隙間を埋める為、色々人員を補充しています。

この話は、『神々の黄昏』作戦頃の話が中心になります。

## 1・動乱への間奏曲

ミッターマイヤーのもたらした波紋は、歴史の流れを微かに、しかし確実に変えようとしていた。

「ちょーっと、あざと過ぎる気もするが、まあこれが駆け引きってもんなんだろうな」

士官食堂で、ボロディン氏の演説を聞いていたオリビエ・ポプランの感想である。

うひゃひゃと笑いつつ、しかし微妙な表情を浮かべる腐れ縁の相手を、クロスワードに没頭していると思われたイワン・コーネフがいなしに掛かる。

「お前さんの口から、『駆け引き』なんて言葉が出ようとはね」

「いやいや、恋愛に置いて駆け引きはだな」

「いっつも失敗するもの、だろう？」

さらりと切り返され、ポプランは又パズルに没頭するかに見える悪友に噛み付いた。

「待てこら、コーネフ」

それをさらりと交わし、すたすたとコーネフは食堂を後にする。その後をぎゃんぎゃん喚きながらポプランが追い駆ける。

エースコンビの掛け合い漫才は、留まる所を知らぬようだった。

自由惑星同盟に、エルウィン・ヨーゼフ二世が（全く自己に関わらぬ理由で）正統政府なるものを立ち上げるのは八月も半ば過ぎの事である。

尤も、その情報はドーソン大将の努力に関わらず、未確認情報として、白々と巷に流れていたが。

しかし、それをセンサーショナルに取り上げるマスコミは皆無で、ただ一人、

『それが事実なら、彼を為政者としてではなく、一個人の亡命者として受け入れるべきだ』

と、訴える者がいた。尤も、皆聞き流してしまっていたのだが。

「他人の、正気を疑う瞬間と言うものが有る事を、再確認させられたな。ルドルフに正気など期待した覚えなど無いが、毎度毎度呆れさせてくれるものだ」

ノイエサンズシー

帝国暦488年11月、新無憂宮を視察するラインハルト・フォン・ローエングラム公爵の呟きである。

彼の後ろには、新たに組織された親衛隊と、首席秘書官となったヒルデガルド・フォン・マリィンドルフ伯爵令嬢が続く。

60平方kmの敷地に、五万人の侍従、女官があり、宮殿内にエスカレーターやベルトウェイが無いと言う概要は知っていたし、一部の例外を除いてほぼ総ての建築物が宮殿に倣い、地階から地上に上がるものを含めてエレベーターの存在が無い事も知っていた。が、五万人の侍従、女官達も貴族から選出された為に『彼らの為の使用人』が、一人あたり多数存在し、その為の居住区画まで存在する事を知った時、流石のラインハルトも嘲笑を通り越して、ただ呆れ返るしかなかった。

『そう言えば、姉上から聞いたな。貴婦人達は靴の華奢な構造から、三階以上の建築物に上がるのは苦痛であり、「御下命無き限り上階に上がらない」と言うマナーすらあると』

ラインハルトは、スラックス姿の伯爵令嬢を見る。

若き提督達の早足に充分付いてこれる彼女に、自然好意の表情で問うて見た。

「フロイライン、何の為にここまで人力による必然があったものかな？」

別に、あの同盟の《アルテミスの首飾り》何ぞと言う馬鹿馬鹿しいものを備えろと言う訳ではない。

極真つ当な防護システムと、整合性の取れた人材配置があれば、あそこまで赤子の手を捻るが如く制圧は出来えなかった。もう一幕あつて然るべきだったろうに、と。

キルヒアイス提督の進言もあつて、首席秘書官として辣腕を振るう事となったマリィンドルフ家の麗しい令嬢は、涼やかな声で返答した。

「おそらく、銀河全土が絶対権力の下、『叛乱を起しえない』と言う前提において造られたが故と思われ、閣下」

「砂の城が」

ラインハルトは、今度こそ冷笑した。何が『弱者必衰』か、成り上がつて得た権力に胡座を掻いていただけではないか。

この時点で、ラインハルトの新無憂宮への興味は完全に失せて見えた。好奇心を持つ価値すらないと思つたようだった。

「ルドルフのアナクロ趣味に、付き合つてやる謂れなど無い」

そう言つていた彼が、新無憂宮の一部改装と警備システムの機械化を命じたのは、数ヵ月後の帝国暦489年6月の事であった。

視察直後の帝都全土に及んだ人災と、それによつて起きたキルヒアイス提督の長期療養、そしてガイエスブルグによる遠征の失敗と続いた為に、そんな足元の事に気を廻す余裕が無かつたのだと思つていた。

確かに、新無憂宮の事はそれまでラインハルトの意識からすつぱりと抜け落ちていた。

仕事を半分、肩代わりしてくれていた親友の不在が彼をして職務に忙殺していたのは確かである。だが、同時に彼に新無憂宮の住人に対する悪感情をわざわざ掻き立てた者がいたのも事実である。

それが、彼の登極と同時に帝国を逃げ出した反ローエングラム派

の貴族達であり、そして同盟潰しを決めたアドリアン・ルビンスキ  
ーらフェザーンの策謀家達である。

ケスラーから密告に付いての報告を受けた時、仕事仕事でささく  
れていたラインハルトに、今まで忘れていたゴルデンバウムと言  
う存在に対する不快感が、一度に吹き上がったのである。

そう、特に今も玉座に乳母に抱かれてでなければ座れないあの子  
供の事を考えた時、ラインハルトの心理状態はけしていい方向には  
向きえなかったのだ。

何しろお飾りとは言え皇帝、そして権力の篡奪者と見られるライ  
ンハルトの預かり知らぬ場所で彼が怪我を（あまつさえ死んだり）  
した場合、喻えそれが空から降ってきた隕石の所為であったとして  
も、総ての非難はラインハルトに向けられるのだ。

『わざわざ引き取って、面倒を見ようと言う殊勝な奴らがいるのだ、  
それに渡して何が悪い』

戦略家として、次の戦いの為の布石とする半面で、ロイエンター  
ル相手に身に付けてしまった怠け癖が、頭を擡げた瞬間でもあった  
のかもしれない。

わざわざ手を尽くしてエルウィン・ヨーゼフ二世を退位させるの  
ではなく、勝手に玉座から持ち去られるのを待とうと言う気になっ  
たのだ。

とにかく、ラインハルトは幼帝誘拐と言う貴族達の蛮勇を、人知  
れぬ場所で諸手を上げて迎え入れようとしていた。

但し、その上でラインハルトはケスラーとモルト中將とに、新無  
憂宮に機械式の監視システムを取り付ける為の準備を命じた。

「新無憂宮に、今更往時のような兵団を配置するつもりは更々無い。  
そうである以上、必要な場所を機械で補えば問題なかるう。フロイ  
ライン、信用出来る業者、いやシルヴァーベルヒがいたな」

フロイライン・マリィンドルフ  
マリィンドルフ伯爵令嬢にそう命じながら、その位は掻い潜る才  
覚は求めて良い筈と、ラインハルトは本気で思っていたのである。

結果から言うなら、幼帝はそれぞれの希望通り新無憂宮から連れ去られた。

フェザーン側からの情報を得て、慌てるランズベルク伯を連れてレオポルド・シューマツハはその夜の内に行動を起したのだ。

又、ケスラーとモルト中將とは、それぞれ機械導入の為の勉強会と警備兵の再編の為に宮殿から出払う形となり、迅速な行動に移れなかった事も侵入者に有利に働いた。

事件直後、先に戻って来たのはモルト中將の方であつたが、ジキスムント帝の像を触って良いかと問う憲兵達に絶句してしまう。

又、何とか像を動かし、地下道を追跡したもののシューマツハの仕掛けたブービートラップによって、多くの負傷者を出してしまつたのである。

相次ぐ不祥事に、自決の覚悟と共に報告に来たモルトに向かつてラインハルトは秀麗な顔に幾ばくかの苦笑を浮かべてこう告げた。

「私の命令による任務中の事件である事、そして先に憲兵に対して下らないかつての慣習や命令を撤廃していなかった私の非だ、中將ばかりが責を感じる必要は無い」

「しかし」

昔気質の軍人であるモルトに、ならばとラインハルトは命令を下した。

「それでは、卿に命じる。

新無憂宮の地下道の全調査と、監視システム設置の総指揮を取るように。

確かに、陛下を誘拐されるなどと言うのは言語道断の事態だが、それもこれも時代遅れも甚だしい、新無憂宮のアナログ趣味の招いた事態だ。その改善をもつて、失態を回復せよ。良いな」

……流石に、半分は自分の望んで引き起こした事態であつたがために、そのとばっちりで真面目な人間を自殺させる事はラインハルトにも気が引けた。

何より、それで療養中のキルヒアイスに叱られる事を、無意識の内に避けようとしていたのかもしれない。

オーベルシュタインは、そんなラインハルトの行動に幾ばくかの非難の視線を向けた。

あまりにもどつちつかずの行動に思えたのである。

だが、そんなものにラインハルトは目もくれず、新たな戦いにのみ向かい合おうとしていた。

「取り敢えず、これからどうするんだい？」

声だけの相手は、事も無げに応えた。

『そりゃ、これからは喧伝して欲しいのさ、ローエングラム公がフエザンから侵攻するつもりだな』

「おいおい、まさか」

『そのまさかがあるかもしれないってのを、言って欲しいのさ。何、信じて貰えなくてもいいんだ。それを耳にした奴がいるって言うのが重要なんだ。どうも、フエザンから洒落にならないものが押し付けられそうだからな、ちびつとでも手を打つとかなきゃ、後々困るのはこっちだ』

千里眼宜しくそう言った相手に、取り敢えず渋って見せる。

「だが、そんな事公共放送で流せるのか？」

『まあ、どんどん打ち切られるだろうが、その為にお前さんのブレインにパトリック・アッテンボローって言う男を入れたんだ。大丈夫、上手くやるだろう』

「……お前さん」

ほとほと疲れたと嘆息するこちらに、向こうは「時間がない」とばかりに切り上げに掛かった。

『取り越し苦労ってんらいいさ。まあ、取り敢えず宜しく頼む』

特殊回線を切ると、ボロディン新代議士は深々と息を吐いた。

彼の黒幕は、色々と手を打っているらしい。

尤も、本来ならここでうんざりと溜め息を付いているのは某居眠り提督だったらしいのだが、彼には向かぬと黒幕側で早々に切り替えてしまったらしい。

とにかく、下手な戦場よりも大変な計略を託され、ボロディンはデスクから立った。

時間は有限で、しかも逃げ足が速いと来ていた。

## 2・角笛は吹かれる

演説会から三日後。

イゼルローン要塞内の、民需用超空間通信局のブースの一つで、とある父子喧嘩が繰り広げられている。

「何やってんだ、親父っ!!」

ダスティ・アッテンボローは、大枚叩いてハイネセンへと通信回線を開いていた。

ここで、軍用回線を使わないのが彼の良識と言つか、両親の教育の成果であろう。

さて、この息子を世に出す片棒を担いだ男は、一呼吸置いてにかりと笑った。一呼吸ずれるのは、超空間通信のタイムラグの所為である。

流石に、民需用は軍需通信より回線に無理があるのか、どうしても遅れるのである。軍需用の回線に、民需用の回線が何割か押されているのかもしれない。

『決まっている、楽しい事だ』

「何考えているんだよ、あんたは!」

息子の叫びに、又一呼吸置いて父親は楽しそうに歯を見せた。

パトリック・アッテンボローはそんな男である。

『それは秘密だ。お前は頑張って革命ごっこをやってくれ。俺は楽しく政治ゲリラをやる。じゃあ、金が勿体ないから切るからな』

「俺の金だろうっ! 畜生、くそ親父っ! 俺に隠れて楽しそうな事やりやがってっ!!」

この子にしてこの父ありと言うべきか、アッテンボロー家の嵐は始まったばかりのようである。

宇宙暦七九八年、八月二〇日。

ヨブ・トリユーニヒトによって、幼帝エルウィン・ヨーゼフ二世の亡命と彼を元首とする『銀河帝国正統政府』なる有名無実の政府が立てられた事が公表された。

その時、野党席から激しくそれに対して『否』を叫んだ者がいた。誰あるう、ジェラルド・ボロディン新代議士である。

「そんな馬鹿げた事があるかつ！ それなら何故、あくまで一個の亡命者として扱わないっ！」

将官に上り詰めた男は、かつて艦隊を指揮したその肺活量を持って、戸惑いつつも安易なお祝いムードにある議場全体を一喝した。「大体、七つかそこらの子供が、自主的に亡命なぞ求めるものかつ！ 周囲の貴族達の思惑によって、この自由惑星同盟へ『拉致』されて来たに決まっているっ！ それではローエングラム公に口実を与えるだけではないかつ！」

周囲の、トリユーニヒト派の議員達がボロディン氏を押さえ込もうとし、テレビクルーの「カットしろ」と言う声が漏れる。

そして、フレイムアウトぎりぎりのところで、ボロディン氏の叫びが響いた。

「いいか、イゼルローンにはヤンがいるが、フェザンから帝国が来たら打つ手が無いぞ！ ローエングラム公が、フェザンをそのままにしている筈は無いんだからなっ！！」

その直後、中継は一時中断し、五分後に何事も無かったように再開され、トリユーニヒト議長の満艦飾の美辞麗句が並べ立てられた。

遠くイゼルローン要塞で中継を見ていたヤン艦隊の人々は、呆然と呆気と怒りと失望、そして緊張とを大鍋に突っ込んで煮込むような状態にあった。

その中で、ウォルフガング・ミッターマイヤーは中断直前のボロディンの叫びに、雷に打たれたようになっていた。

あの満席の議場の中、ローエングラム公の行動を看破した者がい

る。しかもたった一人、それも本来なら死んでいた筈の人物。つまり。

「ミッターマイヤー少将、顔色が悪いぞ、大丈夫か？」

「あ、いえ、大丈夫です」

声を掛けて来た要塞防衛指揮官にそう答え、ミッターマイヤーはそつと汗を拭った。シェーンコップ

「多分、禿げの黒狐<sup>ルビンスキー</sup>が演出協力なんでしょうけど、要するにあの禿げ、帝国と手を組んだって事ですかね？」

その横で、これはかなり憚然としているガウエイン・クラスター少尉が頭を掻く。同盟の学校に進む為に一応戸籍を移したものの、彼はフェザーン出身である。

「クラスター少尉、どう言う意味ですか？」

皆に飲み物を配りながらのユリアン・ミンツ准尉の問いに、紙コップを受け取りながらガウエインはばつさりと言い切った。

「帝国と同盟を秤に乗せたら、帝国の方が投機先として魅力的って事。フェザーンは商人の星だからね、今まで通り双方に金を撒くより帝国に肩入れして同盟を潰して、赤字を帳消しにしようって考えてるんじゃないかな」

少年の辛辣な物言いに、ヤン・ウェンリーは特に異論を挟まなかった。

その直後に、もつと深刻な発言がモニターからぶち込まれた為である。

ヤン艦隊から見て、所謂『砂の楼閣』であるところの『銀河帝国正統政府首相』なる存在は、軍務尚書としてウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ客員提督<sup>ゲストアドミラル</sup>の名を挙げたのだ。

無論、全くの事後承諾で、しかも既に同盟政府側が了承している以上、メルカッツ提督が辞退する事は不可能な状況にあった。

不信の目を拭うように、ヤンは頭を掻いた。

「私がレムシャイド伯とやらでも、確かにメルカッツ提督を軍務尚

書に押すがね」

「同感ですな」

「しかし、そうなればメルカッツ提督は、イゼルローンを離れなければならなくなる。彼らは提督が皇帝の側に、いや自分達の側にいないなど認めないでしょう」

頷くシェーンコップが続けて、これは些かうんざりした口調でミッターマイヤーは呟いた。

不可解そうに視線を向ける周囲に、ミッターマイヤーはこれまでの  
の  
向こう側での  
経験を基に説明する。

「ざつと見たところ、閣僚の中に軍人経験者はいません。彼らは、将帥さえいれば兵士は沸いて出るとも思っているでしょう。貴族領では、領主の命令で領民を徴兵出来ますから。ですから、最終的な自分達の守りとして、メルカッツ提督を自分達の側に呼び寄せたいと思っている筈です」

この言葉に、ムライ少将やダスティ・アッテンボロー少将が鼻白む。

ワルター・フォン・シェーンコップは、やれやれと気障に肩を竦めて見せた。

「他力本願も、ここまで来ると清々しい」

「だったら、いつその事シェーンコップ少将とミッターマイヤー少将も呼べばいいでしょうに。薔薇の騎士連隊ローゼンリッターに守って貰えば、下手なシエルターに入るより安全なんじゃ有りませんか？」

飲み干した紙コップを弄びつつ、投げ槍にガウエインがそう言う  
と、ぶつとあちこちから笑いが漏れた。

シェーンコップはがささとガウエインの頭を撫でたが、ミッターマイヤーの方は生真面目に困った顔になって、二十歳にもなっていない副官を見た。

「私は平民だからね。シェーンコップ少将ならともかく、彼らの思考の外にいるよ、私の事は」

「……いえ、そんな真面目に答えてもらつと、ちょっと」

ガウエインが頬を掻く横で、アッテンボローが別の話を始める。寧ろ、こちらの方が懸案だろう。

「こうして、派手に花火を揚げた以上、帝国からも当然の返礼が来ますね」

その答えは、ほんの数時間後、夕食を摂り終えた人々の前に突き付けられるのである。

何とは無く帰りそびれたミッターマイヤーは、そのまま分艦隊長<sup>オフ</sup>事務室<sup>イス</sup>で書類の整理をしていた。

いや、正確を期すなら書類整理をしつつ、ぼんやりと思考の海にたゆたっていた。

「……は、否ローエングラム公は、フェザン侵攻を行うだろう」  
覆しよの無い事実として、ミッターマイヤーは確信していた。  
確かにあの時と事情は違う。国力こそ劣るものの、同盟にはヤン以外の人材も残っている。

だが、彼の人の気性として、あの停滞を嫌う霸王が、歩みを止める理由を思い付けないのだ。

ジークフリード・キルヒアイスは健在だが、まだ病床にあるという。

あの時と同じに展開するとは思えないが、同時により状況が悪くなるのではないかと言う懸念が有る。

客観視するようになって、更に目に付くようになったせつかちな『オーベルシュタイン』の方法論と、何よりフェザンの存在である。

フェザン、地球教、その極彩色に彩られた禍々しい響きに、ミッターマイヤーの表情は自然不快に染まる。

「いっそ、フェザンに行ってみるか」

自然に口から漏れた呟きに、苦笑と共に頭を振った。

侵攻となれば、おそらく牽制と陽動の為にイゼルローンに攻勢が

掛けられる。

その時、その指揮を取るのは親友ロイエンタールの筈である。ならばこそ、慣れないフェザーンの調査より、イゼルローン要塞で戦闘に参加する方がよほど役立つだろう。

しかし、病巣が判っているのに、手が打てぬ歯痒さといったら！「フェザーンですか？」

不意の声に顔を上げると、コーヒーを運んで来てくれたらしいガウエインの姿があった。

同盟でも非常に珍しい、朱金にも見える金茶の瞳の少年は、コーヒーと軽焼き菓子の皿を置くとミッターマイヤーに向き直った。

「何か、あるんですね」

ミッターマイヤーは年若い　　そして同じように本来と違う時間帯で生きる副官に向かって、必死に言葉を選んだ。

「　　ガウエイン、種を撒いて芽吹くまで、時間が掛かる」

「　　ええ」

らしくない物言いだ、ガウエインはその続きを黙って待った。

「芽吹く前、種の段階で止めたいと言うのは、きつと無茶な話なんだろうね」

「フェザーン侵攻、じゃありませんね。その話」

ミッターマイヤーは不可思議そうに顔を上げた。

ガウエインの方は、実はその話の為にコーヒーを口実に来たのである。

「最近アングラで、飛び交っている情報が有るんです。『帝国はフェザーン経由で同盟侵攻を目論んでいる』って」

その言葉にはっとなる。

そう、前よりも人材が、国力が残っている。

ならば情報収集力も比較すればずっと高い筈なのだ。事実苦笑し、頭を掻くミッターマイヤーにガウエインは言葉を続けた。

「……笑い話だと思いますか？」

「いや、実際そうなんだ。」

ローエングラム公は、フェザー

ンに侵攻するつもりだ。その為に……」

ふっと、意識の底で繋がる単語。

エルウィン・ヨーゼフ、フェザン、そしてローエングラム公。

あの当時、全く気にもしなかった事が今判る。

そして、ルビンスキーが、地球教が、何を狙っているのか。

そも、キルヒアイスの重症が、奴らの策謀の結果ではないと言う保証は何処にも無い。

では？

「ミッターマイヤー少将？」

「ガウエイン、ヤン司令官は？！」

椅子を蹴るなり、ミッターマイヤーはそう叫んでいた。

『森林公園の作戦会議』と、後にガウエインに揶揄られたものであるが、ミッターマイヤーは公園のベンチでまどろんでいた要塞司令官を捕まえた。

まだ眠たげなヤン・ウェンリーに、先程のガウエインが拾って来た情報を話したのだ。

「この情報が同盟で広がっていると言う事は、フェザンにも流れていると言う事ですよね？」

「いや」

だが、ヤンは喰い付かない。

「どうだろうな。寧ろ、同盟国内から出た気がする」

「なら、まだ打つ手は残ってるんじゃないですか？！」

ヤン・ウェンリーは静かに、鋼色のミッターマイヤーの目を見詰める。

帝国人の屍山血河によって築かれた『不敗』の名を持つ男の、宇宙の闇の如き黒い目。

「そこまでは、私の権限じゃないよ」

「ヤン司令っ！」

「ミッターマイヤー提督」

根負けしたかのように口を開いた黒髪の魔術師は、言葉を搜しているようだった。

「本星から、近々人事の再編成

異動の予定ありと、連絡を

受けている。多分、フェザーンに行く人間も出るだろう。下準備が必要だね」

「はいっ！」

詳しい事はキャゼルヌ事務監にとの言葉に、『疾風』の名に相応しく走り去るミッターマイヤーと、一礼して彼を追うガウエインとを見送りヤンは溜め息を吐いた。

やれやれ、『鬼門』と言うものはあるらしい。

せずに済むなら息もしたくないと言うのに、仕事をさせたがる人間の何と多いことが。

そう、ミッターマイヤーは再びヤン・ウェンリーの尻を叩く事に成功したのである。

そして、ラインハルト・フォン・ローエングラムによる『宣戦布告』は、その直後に叩き付けられた。

『誤った選択は、正しい懲罰によってこそ矯正されるべきである』

この言葉を、銀河の半分の大多数は恐怖と共に、ある者は失笑と共に、そして、ほんの一握りの人間は不退転の覚悟と共に聞いたのである。

それだけでも十分過ぎるのに、そこに持って来て、同盟首都星から小さいながらももう一つ爆弾が投げ込まれた。

ユリアン・ミンツの少尉昇進と、フェザーン駐留武官への転属命

令が届いたのである。

ヤン提督の生活能力を知る一部から、『ヨブ・トリューニヒトに依るヤンウェンリー謀殺』とまで騒がれたその辞令に、一度は「嫌だ」と騒いだユリアンだったが、ヤンからの説得と『頼み』を受けて、渋々ながらも受諾した。

そのユリアンに、ガウエインは一枚のメモを渡した。

そこには、彼には読めない妙な一綴りの文字と、住所と名前が書かれていた。

「リ、シユー、イン？ これは？」

「昔、フェザーンに居た時に暮らしていた、集合住宅の大家さんなんだ。元惑星警察の警部さんで、親族にも現職警官がごろごろしてる人でね、昔の付き合いで割りと裏世界にも顔の利く人だから、物を盗まれたり、最悪夜逃げしなくちゃならなくなったら頼るといいよ？ 『ガウ仔の知り合い』って言ったら、少しは優遇してくれる筈だから」

そう言った後、くすつと笑ってガウエインは言い足した。

「厳しい顔してるし、軍人には厳しい反応をすると思うけど、大丈夫、正義感が強いだけだから。ヤン司令と御先祖が同じ国の出身なんだ、平気だからね？」

その言葉に送られて、ユリアンは『銀河帝国正統政府』に出向するメルカツ、シュナイダーと共に首都星に向かった。

宇宙暦七九八年、九月一日の事である。

### 3・狼の歩く道

話は、少しだけ時間を遡る。

ミッターマイヤーが踏み込むまで、実のところヤン・ウェンリーはある意味ストライキを起こしていたようなものであった。

あれは捕虜交換式典の時。

「ヤン・ウェンリーは、イゼルローン方面での敵の攻撃にさえ備えていれば良い。フェザーンに関心なぞ、越権行為に過ぎん」

時間をやり繰りして（正確にはしてもらって）、フェザーン経由によるスパイ潜入の可能性に付いて統合作戦本部に言上した結果、したり顔の連中からそう跳ね付けられた。

拳句にそれが事実であった事も、クーデター騒ぎで綺麗さっぱり忘れ去られたらしい。

さもなければ、あんなくそぶざけた『査問会』なんぞ起こりようも無い。

「正面から行っても同じ事だよなあ。……いや、越権ってところは思いつくか」

しかも、二度フェザーンとなれば、内容無視で感情のこじればかりぶつけられよう。

「危険性が、言っている奴に対する好悪で変わるなら、楽だろうなあ」

実際のところ、ヤンは安穩と寝こけている訳ではなかった。

ただ、虫が来ない事を良い事に、ベンチの上でだらけて思考をルーティンさせていただけなのだ……らしい。

しかし、そんな不可侵且つ神聖な時間は、尻を叩きに來た帝国から來た虚懐にして才幹と人間性まで兼ね備えた元將帥によって破られた。

楽園から追われた以上、行動を取らねばならない。が、  
「向き不向きつてものが、あるんだけどなあ」

埒も無い事を呟いたヤンの表情が急変し、その直後、自然公園内にいた人々は、『我らが司令官』の猛ダッシュと言う、世にも珍しいものを目撃する事となった。

『何で気付かなかったんだ、私って奴は』

彼の呟きは、誰も聞く事が出来なかったが。

九月に入る頃、帝国は来る大攻勢に向けて熱気に包まれていた。帝国軍首脳部で囁かれる「一億人、一〇〇万隻体制」と言う言葉は、日々現実味を帯びようとしていた。

ラインハルト・フォン・ローエングラムの発した『銀河帝国正統政府』と言う道化と自由惑星同盟への『宣戦布告』が、軍籍に無い一般平民の若者を軍の徴募事務所に走らせていた。

彼の張ったフェザーンと同盟への罾は、同時に平民達を扇動する事にも成功していたのである。

そんな、来る戦場への昂揚感に包まれる高級士官クラブ『海鷲』（ゼー・アドラー）にオスカー・フォン・ロイエンタールはいた。彼に、数ヶ月前までの荒んだ空気は無い。

特に今夜は、失調を取り戻そうとするが如く特に親しい同期のみならず、他提督や士官とも語らっている。

元々、彼は軍人として尊敬されており、予想される大戦を前に有名な戦術家で名将の誉れ高い上官と話せる機会に士官達は胸躍らせ、同僚の大半は彼がこの来る戦いを前に、部下や仲間との親睦を求めていると信じた。

実際、彼は何時に無く満足げだった。

……尤も、ワールンなどはそれこそに不安を抱いたものだが。

『介在者がいる』

それが、ロイエンタールの出した結論だった。

彼は、論戦や親睦の為に『海鷲』に来た訳ではなかった。

この数ヶ月間の調査の、言わば最終検証の為であった。

予想は誤る事無く、『ウォルフガング・ミッターマイヤー』は『  
気の毒な亡くなった有能な将官』または『名前だけは知っている』  
にすり替わり、あの万人が忘れようもない『ガイエスブルグ元帥暗  
殺未遂事件』すら、微妙に変わっている。

友との再びの別離以来、迷走する心を押さえ込み、本来の冷徹さ  
で出来る限り、即ち合法非法込みでの調査をし、今得た答え、そ  
れは。

『ここにいるほぼ全員の記憶は操作されている』

ロイエンタールは笑った。

恐らく、自分が『気付いた事』を知った相手からのリアクション  
が来るだろう事を予想して。

そして。

「悪い笑い方をしちゃいけませんよ」

ロイエンタールは、ゆっくりと振り返った。

彼の背後、総て埋まっていた筈のボックス席に、一人座っている  
予想の相手に、いっそ魅力的に笑い掛けた。

「今夜会えると思っていた。望みが叶って喜ばしい夜だ」

そして、『ヤン・ウェンリー』と名乗った占い師の額に、隠し持  
っていた銃を突き付ける。

「俺は、忘れてはいない」

見縊<sup>みくび</sup>って、記憶を取り除かなかったと言うならお生憎な話だ。

宣戦布告をしてやろう。例え今ここで銃が効果無かろうが、銃の  
引き金を引ける事こそ重要。

誰か判らぬ存在の思い通りになぞ、させる気は無い。  
ロイエンタールの黒と青の炎の眼差しに、深遠のような黒が交差する。

眩しげに目を反らしたのは、占い師の方だった。

「知った方が後悔するかもしれませんよ？」

「上等だ」

かちりと、安全装置を外す。

俺は絶望を見た。

あれより、絶望する事など有り得ない。

友の血に染まった部屋、彼の自分の為の絶叫、たった一瞬笑ったまま

……胸が痛い。焼け付くように。

思い返すロイエンタールに、深淵の果てから声が告げる。

「それが、力」

「?!」

占い師は、彼の胸を指差す。真っ直ぐに心臓を。

「その炎こそ、彼の力になる」

「『彼』だと？」

「破滅を食い止めようとする、ミッターマイヤーさんの」

予想外であつたにも拘らず、ロイエンタールは困惑しなかった。

寧ろ、今まで目を背け続けていた事を突き付けられた気さえた。合理的主義者である彼には、謎めいた言い回しは不快だったものの、合理的主義者であるだけに、ここまでくれば気付かずにはられない。

填まって行くピース。

ミッターマイヤーの眼差し、あれは目的があつての事。  
では。

「お前は、卿は、ミッターマイヤーの為に行動しているのか？」

銃を外す事無く問うロイエンタールに、占い師はいつそにこやかに答えて曰く。

「いいえ、違いますよ」

「今更<sup>とつかい</sup>韜晦する気が？」

睨み付ける美丈夫に、四〇絡みの東洋人はゆっくりと頭を振った。  
「私は、私の願いの為に」

脳裏に浮かぶのは、公共放送に流れる姿ではなく、最後に別れた時のあの幼い姿。

紅葉の手を伸ばして、自分の後ろを付いて歩いた種違いの弟。

そう、皇帝と言う名の男が抱え込んだ凍えた炎と、  
ロイエンタール

貴方のかつての捻れた炎に巻かれて、

未来を奪われてしまう筈の『弟』の為に。

その言葉は、口にこそ出されなかった。

しかしその怒気と哀しみは、ロイエンタールに違えずその本質を  
伝えた。

その言葉に『嘘』は無いと。

「ああ、そろそろフェザーンに行かなくては」

そう言つて、占い師は銃に頓着する事無く立ち上がった。

その後ろに、見た事もない、朱塗りのオリエンタル趣味の扉が見える。

その後姿に向かつて、銃をぶつ放そうとしたロイエンタールはその次の瞬間、

「おい、大丈夫かつ！」

聞き慣れた大声と共に、容赦無く揺すぶられ、ロイエンタールは眉を顰めた。

「このくらいで潰れちまったのか？ 随分弱くなっただんじゃねえか？」

そう笑った、オレンジ色の髪の同期の腕の時計に目をやり、ロイエンタールは改めて自分の腕時計を覗き込み、その表示ににやりと笑った。

「ふつ 夢ではないと、言いたい訳か」

ビットンフェルトと店の大時計の時間は午後１１時３分。だが、ロイエンタールの時計はまだ１１時になってはいなかった。

結局、煙に撒かれた様なものであったが、ロイエンタールの心は落ち着いていた。

ミッターマイヤー、お前の望む事を行っならそれでいい。

だが、俺も俺の望みを叶える。

お前を連れ戻し、そして。

その頃、イゼルローン要塞はある種の緊張状態を維持している状態にあった。

帝国  より端的に言うならローエングラム『公』からの宣戦布告以来、ミッターマイヤーは活発にヤン司令官とダステイ・アッテンボロー少将の下に通っていた。

『布告』がある以上、陽動であれ何であれ、必ずローエングラム公はこちらに大軍を差し向けて来る。

その来る戦闘<sup>きた</sup>の為に、打てる手を打てるだけ打つ。その為だった。

その日も、勤務時間を結構オーバーするほど会議が続いた。

「ああ、やつぱり。お腹空いてませんか、皆さん」

長くなるからと、先に帰るように言われていたガウエインがひよっこりと顔を出した。

なにやらふわりと、ミッターマイヤーには馴染みの薄い、しかし実に魅力的な香りを纏い付かせてだ。

その香りに、ヤン司令官が懐かしそうに顔を上げた。

「ほう、ピーマンと牛肉の細切り炒めだね」

「チンジャーロースーって言いましょうよ、提督。中華系なんだから」

そう言いながら、ガウエインは四種類の料理を手際良く、書類の片付いたテーブルの上に並べて行く。

チンジャーロースー、八宝菜、てんこ盛りのシュウマイ、そして肉団子の甘酢あんかけ。

どっさりとした量に呆然としているミッターマイヤーとアッテンボローに、紙皿と使い捨てフォークを差し出し、ガウエインは笑った。

「お二人も味見してください。さつきグリーンヒル大尉と、シェーンコップ少将にも声掛けしましたから」

暫くすると、二人と共に臭いを嗅ぎ付けたか、陸戦隊や空戦隊の何人かが紛れ込み、結構な人数になっていた。

「しかし、又何でこんなに？ わざわざ買って来たのかい？」

「いいえ、俺が作ったんですよ、ローゼンバンク中佐のフラットでキッチンと人手借りて」

肉団子を摘まみながらのカスパー・リンツの問いに、ガウエインがあっさりと答えた。

「ミンツ少尉に頼まれたんです、『ヤン司令官に食事を食べさせて欲しい』って。何時もキャゼルヌ家に頼る訳にはいけないし、司令官殿は時々食事時間を忘れるからって」

その言葉に、色々な人間がそれぞれの理由で目を反らす。

当のヤン・ウェンリーはと言うと、並べられた料理を食べつつ、微妙に悩んだ顔になっている。

ここだけの話だが、妙に彼の口に馴染んだ味付けなのである。

「っかし、美味しいね、このとろつとした野菜炒め。お前さんのお袋さん、料理上手い人だったんだね」

そう言いながら、人一倍皿に取るオリビエ・ポプランの頭を、冷静にその相棒が叩く。<sup>はた</sup>

それに対して、ガウエインは些か困ったように頭を掻いた。

「まあ、母も料理上手でしたけど。これらの料理のレシピは、行きつけの図書館の司書先生に習ったんですよ」

「へえ、司書の先生？」

「俺、母一人子一人だったから、母が仕事している間、ずっと近くの図書館で遊んでたんですよ。そしたら、その司書さんと仲良くなってる」

そう言いながら、皆に烏龍茶を配るガウエインに、思わず全員が目が集まる。

「そうか。苦労したんだな」

しみじみとリンツが言うと、けららつと笑ってガウエインはこう言った。

「苦労したのは母さんですよ。俺は、大家さんや近所の人に可愛がって貰ってましたから」

「そりゃそうか」

あっさりとポプランが頷き、その場の何人かを残して「それもそうだ」と言う顔になる。

そして、四つの皿が綺麗に空になると、自然にお開きとなった。

「ま、それじゃあ続きは明日って事で。ガウエイン、ご馳走さん」  
アッテンボローがそう言って手を振る。

ヤン司令官はと言うと、グリーンヒル大尉とシェーンコップとが、

両脇を抱えるようにして送って行く。

陸戦隊と空戦隊の面々は、それぞれの目的の為に三々五々散って行く。

そんな彼らの背中を、ミッターマイヤーは感慨と共に見送った。

ここに来て、やっと判った事である。

ヤンが死んだ時にはおぼろげにしか判らなかった事、自分達がどれだけ掛け替えの無いものを失ったのか。

陛下も、ロイエンタールもそして俺も、あの当時は尊敬すべき最強至強の敵と、それ以上の値打ちに気付いてはいなかった。

今になって判った。『ヤン・ウェンリー』（かれ）は宇宙をもう一方から支えていた、興味であり不思議であり、解り合いたいと思う相手だった。

「この世に輝くものが一つだけではない」

と、彼の存在は何時も自分達に、意識にさえならないところで語り掛けていた。

彼の向こうにある何かに、何時の間にか敬意と可能性を感じていた。

こちら側に来て、ようやくと見えたヤン・ウェンリーの背中の意味。

イゼルローンの人々は、決して勇猛果敢だった訳ではない。

彼らは、俺達と違って何を喪い、しなければならぬか判っていたのだ。

ようやくと、腑に落ちた。

「ロイエンタール、俺はお前を敵に回したい訳じゃない。陛下を敵に廻したいのでも。俺は、ここに居る人達を」

そして君を、君等を。

目を閉じたミッターマイヤーの横顔を、横を歩いていたガウエイ

ンはふと見上げた。

人工天体のホリゾントが作り出した夕闇の下、そこに立っていたのはそう、一つの大国の創業の重鎮こそ相応しかろう大人物に見えた。

リスクは負おう。

でも最小限にしてみせる。

それが、お前と戦う事なんだ、ロイエンタール。

#### 4・烈風（かぜ）は彼方へ

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年、九月二〇日。

ローエングラム公ラインハルトは、旧貴族勢力に拉致され、『銀河帝国正統政府』の首班となったエルウィン・ヨーゼフ二世の廃位と、ペクニッツ子爵家の生後六ヶ月の乳児、カザリン・ケートヘンの即位を発表した。

彼女はゴールデンバウム朝の三八代目にして初めての女帝であり、そして最後の皇帝になる事はほぼ明白であった。

「帝位篡奪の、ステロな段取りですね」

帝国側から傍受した、民需放送のニュース映像を見ながらガウエイン・クラスター少尉が眉を顰める。

この時、ミッターマイヤー分艦隊は艦艇の定期検査の真っ只中で、分艦隊のオフィスに艦橋要員ブリッジクルーの女性陣が集まり、書類整理の手伝いをしていてくれた。

「はー、やっぱりあの綺麗な兄ちゃん、皇帝になる予定なんだ」

巻き毛とそばかすが印象的なアイリーン・サザランド准尉が、身長こそ自分と余り変わらないものの年下である少尉を見る。

「ここで、もう一時間入れるか入れないかの差はありますけどね」

ガウエインの言葉に、白金髪をベリーショートのオールバックにした長身の美人が応えた。彼女はアイリーンと共に砲撃士官を務める、デライラ・カーライト少尉である。

「THREE DYNASTY、三国志みたいだね」

「ツアオツアオあるネ」

その言葉に間髪入れずに続いたのは、オペレーターのチャン・リン曹長である。

彼女は、殊更中華系である事を強調するように、長い黒髪を二つのお団子に結い上げている。

それを、仲間達が何故と問った時、彼女曰く、

「お婆から、『世間がお前に求めているのは、ステレオタイプの中国娘じゃっ!』って、言われたもんだから」

との事。……因みに、普段の『アル言葉』も、ステレオタイプの為らしい。

「何だい、そのパオパオって」

眉を八の字にしたアイリーンに、金髪を肩までのボブカットにした少尉の階級章を付けた女性が微笑んで応える。

彼女は、旗艦の主任オペレーターであるコーネリア・アダムス少尉だ。元々は一〇代で博士号を取った才媛ながら、教授陣のセクハラと妨害に耐え切れずに軍に飛び込んだ変り種である。似たような経緯で軍に入ったガウエインとは、良い学問仲間にいるらしい。

「三国志の英雄、曹孟徳よ。彼は群雄の中でも、かなり軽視される家柄の人間だったけど、幼帝を手中に納めて権力を掌握し、三国の中でも尤も力のある国を立てる土台を造ったの」

「曹操と並べるのはどうかな？」

そう言ったのはガウエインだ。

「確かに曹操は戦争に強くて、政治家で、壮絶な人材コレクターだったらしいし群を抜いた存在だったけど。でも彼はローエングラム公と違って芸術家だったし、何より自身は帝位篡奪はしなかったんだ」

黙って、女性陣の話に耳を傾けながら書類を作り続けていたミッターマイヤーは、ガウエインの言葉に顔を上げた。

ミッターマイヤーの代わりに、その言葉への質問をしたのは、ずっとファイリングをしていた索敵オペレーターのケリー・バートン軍曹だった。

「え？　だって、彼が権力者になったんでしょ？」

「帝位に就いたのは、彼の息子。曹操本人は皇帝の一手手前で登極を止めたんだ。名より実を選んだ、実に合理的な人だった。」

これは俺の解釈だけど、彼は帝位に就かないでいる事で、他の英雄……そう、孫権や劉備が即位する事を阻止していたんじゃないか

な？ 一応彼らはその時の王朝に従う立場だったから、王朝が続いている間に自分の国を立てるなんて事出来なかったんだと思う」

「あら、劉玄德が即位を宣言したら、人民は彼に流れたんじゃないかしら？」

コーネリアの言葉に、ガウエインは肩を竦めた。

「まあ、諸葛亮はそれを狙ったみたいだけど、彼本人がそれを出来なかった。彼の本質は、任侠、義理人情に拘る性質だったそうだから。だから部下を大切にしたり、義理の兄弟が殺された時、それまでの政策も軍略も捨てて復讐戦に走っちゃったんだろうね」

「それで言うと、孫権の方はまだしももっと早く帝位に就いたんじゃないかい？ 確か奴さんの地元は土豪の勢力が強かったから、その気になればもっと早く独立していた気がするけどね」

そう、話に加わったのは、司令部からの書類を運んで来たヘルガ・ミュンツァー少佐だ。

一時期は陸戦部隊に所属していたと言う豪快な女性、そんな経歴にすぐわぬスレンダーな体格と長い黒髪の、しかし目は鋭い美人である。その彼女に向かって、ガウエインは首を横に振って見せた。「そうでもありませんよ。土豪の勢力が強いから、まず彼らを取り纏める事から手を付けなきゃいけなかったんですよ。それに、群雄達は皇帝がいる間に即位する愚はよくよく知ってますよ。それやって、こけた奴が同世代にいるんですから」

「袁術ね。確か、伝国の玉璽と言うものを手に入れたからって、皇帝に即位しちゃった人」

「ほんとに手に入れたのは孫堅で、彼の息子が軍勢を借りる質草として渡したのを、そのまま取っちゃった人アルね」

コーネリアとリンが続けてそう言うと、デライラとアイリーンとは肩を竦めた。

そこに、他のメンバーと一緒に食事の準備をしていたマリエ・ローゼンバンク中佐が戻って来た。三つのバスケットにサンドウィッチや鶏肉のから揚げ、カラフルなラップで包んだサラダやソーセー

ジがどっさり詰まっております、大きなポットにはたっぷりコーヒーも用意されている。

「あら、楽しそうね。取り敢えず皆、食事にしましょう。もうとつくに、お昼を過ぎているわ」

「わ、艦長」

「戴きます！」

わつと集まる女の子達の間から、トレイにサンドイッチや色々を取り分けた中佐がミッターマイヤーの方に動いた。

「どうぞ閣下。奥様からの差し入れですわ」

「ありがとうございます」

ペンを置くと、ミッターマイヤーも取り敢えず一休みすることに決めた。

宇宙暦七九八年十一月、ウランフは墓地の片隅にいた。

そこには、まるで周囲から隠れるように、生け垣を廻らせた中に小さな墓石があった。

それは、昨年の救国軍事会議によるクーデターの首班であり、そして裏切り者と刺し違えようとして散ったドワイト・グリーンヒル大将の墓であった。

一人娘がイゼルローンに赴任したままであり、又クーデターの主犯格と言う事もあり、墓地は最低限の管理しか行われていない様子だった。

その寂れた墓に、ウランフが何ゆえ詣でに来たのか、彼の護衛官達には見当も付かなかった。

ただ、グリーンヒル氏の知人らしい、大柄な老婆と暫く立ち話をしていたらしいのだが。

……無論、その老婆の正体が、特殊メイクを駆使したボロディン氏であるとは、修練の足らない青二才達には知るべくも無かったのであるが。

「……なんて所を指定して来るんだ、お前さんは」

周囲に洩れぬよう、声を響めるボロディンに向かって、ウランフはにやりと笑って見せた。

「なあに、ちよつとしたジョークさ。お前さんと俺が、真正面から面付き合せていたらトリューニヒトに警戒されちまうが、敗死した元同僚の墓の前で、見知らぬ婆さんと話し込むんだったら問題無いだろうよ」

その言葉に、「だったら自分が変装しろよ」と言いたかったものの、身長二メートル近いこの男にさせたら怖いだけだと、自分を納得させるしかなかった。

そんなボロディンの気持ちを死つか知らずか、騎馬民族の末裔だと言うこの男はさらりとかう告げた。

「まあ、取り敢えず夏の議会ではご苦労さん。これから、又忙しくなるからな」

「おいおい、未だか？」

「いやいや、これからが本番だな。何しろローエングラム公が来るんだからな」

ウランフは笑ったが、底冷えするような目が全てを裏切っていた。

その頃、ウオルフガング・ミッターマイヤーは落ち着かない日々を送っていた。

帝国軍による同盟、そしてフェザーンへの侵攻、『神々の黄昏』（ラグナロク）作戦の決行日が      彼の覚えている通りならだが      近付いているからだ。

非番のその日、顔には極力出すまいとしている夫に、あの頃を覚えていた妻の方はそつとコーヒーを出しながらこう言い寄越した。

「貴方、皆さんに相談してはどうかしら？」

「エヴァ……」

最近、どこか丸くなつて来た妻の顔を眺めながら、ミッターマイヤーは微かに笑つて「いいや」と首を振った。

「情報ソースの説明が付かない。確かに、ガウエインのように似たような境遇の人間は少なくないらしいけど、彼らも時間の迷子である事は隠している。」

俺に出来る事は、例え泥縄になろうと、その場で全力を尽くす事だけなんだ」

その言葉に、夫のジレンマを見て取ったエヴァンゼリンは、黙つて空になつたカップにおかわりを注いだ。

そこに、

「ただいまっ！」

と、元気な声が響き渡った。

お使いに出ていたフェリックスが戻つて来たのだ。

そのままパタパタと廊下を走り、洗面所で盛大に水が跳ね飛ばされる音がした。

その間に、ひょっこりと黒髪に琥珀色の瞳の少年が頭を覗かせた。

「ミッターマイヤー夫人、<sup>フラウ・ミッターマイヤー</sup>買ひ物袋を何処に置きましたか？」

「まあ、ガウエイン君、フェリックスを手伝つてくれていたの？」

あらあらと、立ち上がるエヴァンゼリンにガウエイン・クラスタ―少尉は笑つて首を振った。

「おまけのオレンジが重たそうだったから、俺が持つてあげてたんですよ」

「そうなんだよ、マーケットのお姉ちゃんがね、おまけだつて言つて五つもくれたんだよ」

ミルクパックと、コーンフレークと林檎三つの入った買ひ物袋をよいしょと持ち上げるフェリックスに、ミッターマイヤーも笑みを零した。

だが、休暇中の副官の来訪に、刺激されるものを感じた彼は、オレンジを下ろして来たガウエインを差し招いた。

「何か、フェザーンで動きがあつたのかい？」

「いえ、フェザンと言うより帝国ですけど」

ソファーに腰掛けながら、短く答えたガウエインは電子新聞用の端末に、もって来た情報カードを差し込み、広げて見せた。

「知り合いに無理を言って、最新情報を送ってもらったんです。四日に、帝国では大規模な演習が行われたそうです。査閲總監にロイエンタール上級大将、三万隻規模の大演習で、一〇〇〇人以上の死傷者まで出したって」

「四日か」

低く唸る夫を、客にコーヒーを出しながらエヴァンゼリンは気遣うように見た。

だが、紙面を見ていたミッターマイヤーの声が跳ね上がった。

「キルヒアイスが復帰したのか!？」

それは、社会面の隅の方に、本当に小さく載っているだけだったが。

「五日付けの情報なので、本当に小さいものですけど。いきなり先陣と言う事はないと思いますが、元帥府には出仕しているようです」  
よ

ガウエインの補足に、ミッターマイヤーは安堵しつつも心の中で気を引き締めた。

恐らく、フェザン侵攻の総指揮を彼が担うのだろう。キルヒアイス

これまで相見える事の無かった強敵と近い将来戦うであろう事実  
に、軍人として喝采を叫んでいるのを感じたのである。

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年十一月八日、帝国はイゼルローンへの遠征軍の陣容を大々的に発表した。

総司令官、オスカー・フォン・ロイエンタール上級大将、副司令官にはコルネリアス・ルッツ、ヘルムート・レンネンカンプの両大將。

その三日前に復帰したジークフリード・キルヒアイス上級大将の

方は、病み上がりである事を考慮し、第二陣として控える事となつたと発表された。

無論、それは嘘であり、彼にはフェザーン方面軍の先陣を任される事となっている。

「卿等の勇戦を期待する」

陳腐な言葉であるが、それも使う人間によつて評価は変わるようだ。

ラインハルト・フォン・ローエングラムの口からその言葉が出た時、聞いていたその場の人間の殆どは、彼の彫像の如き美しさと共にその言葉に歓喜していた。

しかし、その中でただ一人、ロイエンタールのみが昂然と頭を上げ、その言葉に完璧な敬礼を持つて返していた。

理屈は簡単、ロイエンタールは作戦内容よりも、ミッターマイヤーと戦う事になったと言う事実を高揚していたのである。

慌しく荷物を纏める永の戦友を見ながら、フォルカー・アクセル・フォン・ビューローは長閑に茶を啜った。

「急な御達しだねえ。大丈夫かい、ベルゲングリューン」

「……本気で言っているのか、ビューロー！」

ハンス・エドアルド・ベルゲングリューンの方はと言えば、手を止めて話すのも面倒だと、壮絶な勢いで荷物を纏めつつも器用に首だけ黒髪の友人<sup>あくま</sup>に向ける。

本来なら、先月の内に出ていなくてはならない転属命令が、軍務省側の手落ちでつい最近届いたのである。

昔に戻ったような手拔かりにヒステリーを起こしつつ、それでもベルゲングリューンは黙々と荷造りをしている。

「折角、キルヒアイス提督が復帰したのに、まあ寄りにも寄ってロイエンタール艦隊に配置転換なんてねえ」

「仕方があるまい、俺は軍人だ、辞令が来たならそれに従うしかない

い」

生真面目に応える声に、ビューローは軽く肩を竦めた。

声が、全く字面を裏切っている。

雑用で走り回っていたので、ビューローはキルヒアイス提督とロ  
ーエングラム公、そしてロイエンタール提督の間にあつたすつたも  
んたを直接見た訳ではない。

だが、その間元々胃薬依存症の気のあつたこの友人が、更に薬の  
量と種類を増やした事は知っている。

「まあ、ロイエンタール上級大將も優秀な方だ、色々勉強しておい  
で」

「　　そんな事を言い、ここまで来たのか、卿は。そちらこ  
そ準備は良いのか!？」

「そりゃあ、私は残留組だし。キルヒアイス艦隊は一二月出撃だか  
らね、まだ余裕があるとも」

ほろほろとそう答えられ、ベルゲングリューンはガンツと執務卓  
を叩いた。

「だったら、手伝えとは言わん、邪魔しないでくれ！　俺はまだや  
らねばならんことがあるんだ！」

「はいはい」

そう言つて、ビューローはその場を立ち去つた。

暫くして、ベルゲングリューンは親友が書き上げてくれていたら  
しい、転属に伴う雑多な書類を見付けるのだが。

## 5・終らせない為の戦い

丁度その頃、ユリアン・ミンツは護衛であるルイ・マシユンゴと共にフェザーンの街を走っていた。

駐在武官として、赴任して来てまだ一月にもならない。

だが、ここ数日何者かにつけられている気配があったと思っていたら、今回はあからさまに襲われたのだ。

追跡者達は、荒事には慣れているようだが、隠密的な行動には著しく適性を欠いているようだった。

だが、そんな些細な事より、今は逃げる事が優先である。しかし、土地勘の無い二人は裏路地に追い込まれ、ついにどん詰まりに追い込まれてしまった。

「しまった！」

行き場を失った二人は、必死の思いで周囲に扉が無いか窺った。マシユンゴの方は、最悪屋根の上にユリアンを逃がし、自分が囷（くわ）になるうとも思い詰めた。だが、近付いていた足音は、激しい物音に遮られた。

はっと振り返った二人が耳を澄ますと、何人かが殴り合う物音が続いた。そしてそれが止むと、こつこつと一人近付いて来るのが判った。

「おい、誰がいるか？」

聞き覚えの無い、少し訛りのある同盟語が掛けられた。

返事をしたものか、二人が困っていると再び声が掛かった。

「取り敢えず、そこは行き止まりだろう？ 抜け道を教えてやる、早く来い」

「どうします、少尉」

困惑気味のマシユンゴに、暫く逡巡していたユリアンは顔を上げてこつ言った。

「どちらにしろ手詰まりだ。それに、追跡者の仲間なら、ここでわ

わざわざ声を掛けて来るとも思えない」

油断させて、とも考えはしたものの、「結局手詰まりには変わらない」とユリアンは決断してその路地から出た。

長々と続く裏路地のそこに、とても堅気の船乗りには見えな  
い、脛に傷持ちと言った男達が五人、鮪のように転がっている。

その中に一人、眉を顰めながら紙切れを見ている青年が立っている。

服装は、そこら辺の自由商人やその船の乗組員と言った感じだったが、立ち姿の良さから軍人だとユリアンは見当をつけた。それも、多分帝国軍人。

と、その時、二人が出て来たのに気付いた青年が顔を上げた。

ミルクチョコレート色の髪と、限り無く黒に近いダーク・グリーンの瞳の青年だった。年回りは、アッテンボローと同じくらいだろうか？

青年の方は、ユリアンの顔を見て、ぱっと目を見開きまじまじと彼の顔を見た。

「あの……何か？」

「ああ、悪いね。成る程、お前さんが今、<sup>アングラ</sup>非合法情報網で指名手配されている『ユリアン・ミンツ』本人って事か」

そう言いながら、青年が差し出した紙切れを見たユリアンは、そこにプリントされている隠し撮りらしい自分の顔写真と、こと細かく書き込まれた外見特徴に文字通り目を剥いた。

「これは一体っ！？」

「何処の誰かは知らないが、『ヤン・ウェンリーの養子』に二万帝国マルクの懸賞を掛けた奴がいるって言うのは、小耳に挟んではいたがな」

そう言った青年に、長身の青年　　但し、目の前の青年よ

りは少々年上らしい　　が耳打ちした。

それに頷くと、ミルクチョコレート色の髪を掻き上げながら青年は二人に手招きをした。

「部下が、車を用意した。同盟弁務官事務所まで送ってやるから、早くここから離れよう。それと、もう少し目立たない変装を研究する事だ、お前さんは自分で思っている以上に顔が売れているようだよ」

そう言っただけで歩き出そうとした青年に、ユリアンは慌てて声を掛けた。

「待ってください、貴方は一体？ 帝国軍の人が、どうして僕達を助けてくれるんですか？！」

慌てて止めようとしたマシユンゴの手を振り払っての言葉に、青年は振り返って頭を掻いた。

何処か自嘲しているような表情で、青年は先に立って歩く長身の男性を顎で示しながらこう応えた。

「俺の名前はホルスト・ジンツァー、あいつは軍隊時代からの部下のシュワルツコップ。俺達は、まあ帝国軍で生死不明になっている人間さ。戻ったら軍法会議が待ってるんでね、細々と契約船員として暮らしている最中さ」

そう言っただけで、ジンツァーは二人に背中を向けた。

その夜、アドリアン・ルビンスキーは部下からの報告を聞いて、有るか無しかの苦笑いを浮かべた。

「そうか。だが、職務上フェザーンから逃げる事は出来ん。次の機会を狙え」

そう命じて通信を切ると、どっかりと椅子に持たれかかりこう囁いた。

「竜頭蛇尾とは、言わせんよ」

そして暫く目を閉じていた『黒狐』は、新たな手を打つべく体を起こした。

『神々の黄昏』に向かって、多くの思惑が動いてた。

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年、一月二〇日。

丁度その日、ヤン・ウェンリーイゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官は、とある場所に連絡を入れていた。

色々悩みまくった挙句に、やっと『餅は餅屋』と言う諺に行き着いたのである。

『遅かったな、ヤン』

画面の向こうで笑う男に、ヤンは渋い顔を隠さずこう言った。

「私としては不本意なんですよ」

『不敗の魔術師』の言葉に、相手はこれっぽっちも感銘した風も無く話を切り出した。

『さて、ジョン・チャイニース君、次の任務だが』

「誰が、ジョンブルですか」

『ふつ、歴史学者志望の割には雑学が足りんな、ヤン。《ジョン・チャイニース》はヤンキーが付けた中国人への呼称だ』

鼻で笑われ、ますますヤンは渋い……否、どちらかと言うと泣きそうな顔になる。

どうやら、DNAに刻み込まれた苦手意識と言うものは、確かに存在するらしい。

画面の向こう側の相手の祖先から身を護る為、中華人民はどれだけの無茶と無駄を費やした事か！ 今や地球には痕跡しか残っていない  
かつては衛星軌道上からも確認出来る、唯一の巨大建築物だったと聞く  
万里の長城を始めとして、嘗々とヤン・ウェンリーの祖先は努力したものの、肝心な結果は一切出せず終いだっただけのようだ。

何せ現実には、何処吹く風と話を進めるタートル韃靼人の末裔がいるのだから

ら。

『ほれ、余り時間は無い。金髪の坊ちゃんはこちらの捨て札に大枚張って喧嘩を買い取ったんだ、今日明日中にも第一陣はお前のところに来る筈だぞ』

脅しても何でもなく、歴然とした事実だから痛い。

とにかく前後の対策の為、ヤンは針の筵に座り直した。

三時間ばかり掛かって、はやれやれと出て来た司令官を待っていたのは、帝国軍来襲の一報、それも大艦隊の襲来と言ったものであった。

敵襲を見出したのは、丁度哨戒を兼ねて演習中だったミッターマ  
イヤー分艦隊であった。

……実を言えば、そろそろ到達するであろうと考えたウォルフガ  
ング・ミッターマイヤーが、そつと演習予定を出していたのである。  
……おかげで、今回戦艦は汚名を被らずに済んだのだが、それは  
誰も知らない事である。

ともあれ、緊張しつつも楽しい艦隊訓練に興じていたミッターマ  
イヤー分艦隊は、敵軍襲来に大いに戦慄驚愕したのである。

分艦隊旗艦艦橋に、主任オペレーターのコーネリア・アダムス少  
尉の声が響き渡った。肩口で切り揃えられた金髪が、彼女の心情に  
吊られて揺れる。

「敵影発見、数、算定出来ませんっ！」

正面スクリーンに映る、続々と数を増やして行く光点に、戦慄か  
ら来る沈黙が艦橋を満たす。

それを破ったのは、ヘルガ・ミュンツァー副長の一喝に近い声だ

った。

「敵旗艦の確認をつ！」

「は、はいっ」

慌しくオペレーター達がコンソールを弄る中、ミッターマイヤーは黙ってスクリーンを睨み付けていた。

調べるまでもなく、今ここに來た敵の総指揮官が誰であるか、彼には否と言うほど判っていた。

紙コップに入れたコーヒーを差し出しながら、ガウエイン・クラスターが呟く。

「……來ましたね」

「ああ。……ガウエイン、イゼルローンに入電、帝国の大艦隊が襲來したと」

「はい」

軽く強張った顔で年若い副官が通信機に向かうと、ミッターマイヤーは全艦隊に速やかに後退するよう命じた。

如何に狭い回廊内とは言え、敵の大軍を前に浮き足立っているだろっ新兵ばかりの分艦隊で、戦端を開くような愚を彼は冒さなかつた。

流れるような艦隊運動で、速やかに要塞方面へと撤退する分艦隊を、ロイエンタール側も捕らえていた。

賞賛に値する速度と、艦隊統率に見ていた幕僚陣から溜息が漏れる。

「分艦隊とは言え、敵戦力を削ぐに越した事は無い」

と、追撃を具申したヘルムート・レンネンキャンプ大將に、総指揮官であるオスカー・フォン・ロイエンタールはやや酷薄に「無用」と言い捨てた。

その言葉に、コルネリアス・ルッツは小さな敵を追回す事に意義を見出さないのだろうと思ひ、又同時に以前と較べて精神的に改

善されたのだろうとも思っていた。

だから彼は、進言を退けられ、髭を震わせて不服を噛み殺す年上の僚友を宥めに入った。

だが、何の事はない、ロイエンタールはその分艦隊の動きから、その指揮官を正しく看破してただけである。

だからこそ、彼も追撃などと言う無粋で無駄な真似はする気にならなかったのである。

乱世の将としての感覚と、親友への情と言う相反するものを擦り合わせて出した結論によって、ロイエンタールは真っ直ぐイゼルローン要塞へ向かうよう命じた。

丁度その頃、ラインハルト・フォン・ローエングラムは我が世の春を謳歌していた。

半年以上入院していた親友が軍務復帰を果たし、無事第二陣と言う名目ではあったが作戦に参加する事が出来たのだから。

参謀長からは色々ぐちぐちと言われたが、取り敢えず総て聞き流してフェザーン侵攻の青図面に手を入れている真っ最中である。

「ラインハルト様、そろそろお茶になさいませんか？ アンネローゼ様のケーキがございますよ」

「そうか、今行く！」

入力を済ませ保存すると、ラインハルトは端末の電源を落して立ち上がった。

因みに、ここはシュワルツェンの館の、二人共用の書斎である。

キルヒアイスが入院し、姉がキルヒアイスの両親と共に彼の看護に付いていた間、何となく元帥府の執務室に泊り込んでいたラインハルトであったが、退院と同時に館にちゃんと帰るようになったのである。

無論、二人掛かりでお小言を喰らったのは言うまでも無いが。クレープの間に林檎の甘煮を挟み、オープンで焼いたアップル・

シュゼットとたつぷりクリームを浮かべたクリームコーヒーを並べるキルヒアイスの姿に、ラインハルトはほっとすると同時に、心の底から込み上げてくる喜びを噛み締めていた。

思い返せば一月、最初に入った報告は『キルヒアイス上級大将、死亡』であつた。半狂乱で情報を集めさせ、辛うじて即死は免れた事を知ったものの、頭部強打で昏睡状態が数ヶ月に渡って続いたのである。

彼らの職業は要するに軍人で、何時どんな形で死ぬとも限らない職業で。

それでも、ある意味妙な確信の下に、ラインハルトはキルヒアイスは助かり復帰すると信じていた。

そしてそれが達成された今、彼は自分の勝利を、取りも直さず銀河統一の野望の成就を確信していた。

「キルヒアイス、勝つぞ」

あまりにあつさりとした、そして絶対の自信と共に告げられた言葉に、キルヒアイスは軽く眉を顰めながらこう聞いた。

「同盟には、ヤン提督を始めとして、まだ提督方が残っていますよ？」

「確かに、あの親父は怖い。だが、聞けばその相方だった提督は軍人を辞めて政治家に転向したそうだ。ヤン・ウェンリーはイゼルローンに雪隠詰めだ、如何にあの切れ者が頑張ったところで、各個撃破になるだけだ」

フェザーンからの情報には、一応ラインハルトも目を通していたが、彼からすれば、単に同盟が首を締めているようにしか見えなかった。

しかし、キルヒアイスの方はこの状況でわざわざ政治家に転向したと言う事態に、幾ばくかの引つ掛かりを覚えていた。

その考え込もうとするキルヒアイスの、やっと伸びてきた赤い髪を摘まんでラインハルトは笑った。

頭部手術の為に、一

時は丸坊主にしていたのだ。

「やれやれ、やっと伸びた髪が白髪になってしまっぞ、キルヒアイス。折角のケーキとコーヒーが冷めてしまっ、喰おう」

「ラインハルト様……」

フォークを取り上げると、思い出したようにそして悪戯を思い付いた悪ガキの笑顔で、ラインハルトは笑った。

「あの魔術師のお手並みを拝見だ。奴が、ロイエンタールをやり過ごして本隊に合流したとき、意味があるような本隊がさて残っているかな？」

戦後に、ラインハルトが同盟軍の議事録を調べた際、彼を懽然とさせる記録が認め<sup>したた</sup>られていたのだが、それは又後の話である。

## 6・トリスタン攻防戦　～ペーオウルフの誤算

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年十一月のイゼルローン攻防戦は、まずはロイエンタール側の優勢で幕を開けた。

すばやく半包囲を作った攻略軍側は、対応すべく出撃して来た駐留艦隊を要塞砲を封じる形で射程内に引き込み、上手く消耗戦の状態に引き込んだのだ。

この時点で、ヤンはロイエンタールの手腕に感嘆し、ついでこの状況で取りうる最良の策を考えた。

秘密交信の内容もあり、一つ大きな詭計<sup>トリック</sup>を仕掛ける事にしたのである。

悠然と、目の前の混戦を眺めていたオスカー・フォン・ロイエンタールに、オペレーターから戸惑い交じりの報告が入った。

「戦艦ヒューベリオンが出撃して来ました」

「何だと？」

その言葉に、ロイエンタールは反射的に同盟側のトリグラフ級戦艦の数を確認していた。

現在、戦場で確認されているのは一番艦のみで、ミッターマイヤーが乗っているらしい七番艦の姿は無かった。

どうしたミッターマイヤー、お前が守るはずの男を、俺が倒してしまうぞ？

一瞬の逡巡をおくびにも出さず、ロイエンタールは敵旗艦に向かって進撃するよう命じた。

あるいは、これで戦闘を決することが出来れば、ミッターマイヤーを無傷で我が手に取り戻せると言う欲が出たのかもしれない。

彼は知らない。全ての思惑を飛び越えて、強襲揚陸艦に身を潜めている蜂蜜色の狼がいる事を。

あれは、『神々の黄昏』（ラグナロク）作戦の後。何  
度かあった酒場での一時。

『叛乱軍に旗艦に乗り込まれてしまった』

苦笑いした親友の顔。

『なかなか大した技量の獵犬だったな』

今なら判る。親友の相手をしたのは、『薔薇の騎士』（ローゼン  
リッター）連隊元連隊長ワルター・フォン・シェーンコップ。  
ならば。

時間は少し戻って、強襲揚陸艦に乗り込む『薔薇の騎士』連隊の  
面々は久方ぶりの大仕事に高揚していた。

何しろ、前回の要塞上でのどんぱちどころか、あの要塞奪取作戦  
以来の大仕事である。

「囹を出すから、戦闘中の敵の親玉ひっ攫って来いってさ」

「海賊並みだねえ」

そんな軽口を叩き合いつつも、隊員達の誰もが作戦の重要性を悟  
っていた。

何しろ、三艦隊のトップ三人の中で、総指揮官とその下に同格の  
大将二人がいると言う事は、そのトップを掻っ攫えば同格同士動け  
なる事は必定、そうなれば後は『奇跡の（ミラクル）ヤン』の独壇  
場。

馬鹿でも判る理屈と言うのが、彼らの共通認識だった。

さればこそ、彼らは作戦準備に没頭したし、他の者からすれば不  
謹慎極まりないジョークを飛ばし合っていた。

だからぎりぎりになって補充要員として飛び込んで来た奴も同様  
だと思っていた彼らは、最後のブリーフィングも簡単に済ましてし  
まったのだが。

敵旗艦に取り付くや、『薔薇の騎士』連隊は当初の予定通り艦橋、又は高級士官の居住区等へロイエンタールの姿を探して小隊ごとに駆け出した。

そしてそこで発生する防衛隊との攻防戦の為、彼らは中々前に進むことが出来なかった。

そんな中、その小柄な補充要員は一人真っ直ぐある場所目掛けて走っていた。

かつての己が旗艦と同じ基本構造を持つ、勝手知ったる艦<sup>ふね</sup>である。彼が通風口を伝って辿り着いた先は、指揮官専用の更衣室だった。

潜む事暫し、自らも装甲服を纏うべく降りて来た金銀妖瞳の美丈夫が誰何の声を上げるより先に、彼はその傍にいた二人の護衛を打ち倒していた。

振り返ったロイエンタールは、ドアをロックする相手に向かって、いつそ艶然と微笑み掛けた。

「やっと、二人つきりになれたな」

その言葉に、侵入者はヘルメットを脱いで微笑んだ。

そしてその無邪気なまでの笑顔のまま、ミッターマイヤーは戦斧を構えて飛び掛った。

一気に間合いを詰めると見せて、それが逆手のナイフを隠す為と看破したロイエンタールは、あえて大振りに後ろに下がり、ミッターマイヤーの間合いを潰すと同時にリーチを頼みに相手の軸足を狙った。

ここで、普通なら横か後ろに逃げるところを、ミッターマイヤーは真っ直ぐ正面へと踏み込んだ。蹴り込みと同時の斬撃を紙一重で受け流し、ロイエンタールは笑った。

久々に血が滾るのを感じた。

それはミッターマイヤーも一緒である。身の内の狼の滾りが、彼

の瞳を鋼色に染めている。

「会いたかったぞ、ミッターマイヤー」

「俺もだよ、ロイエンタール」

滑るような長身の踏み込み、隠しナイフの存在を意識したミッターマイヤーは背面へ回り込もうとした。が、それこそを誘っていたロイエンタールによって、右肘内側への掌打と巻き込みを喰らって、手の中の獲物が飛んだ。

だが、振り翳されるナイフを掻い潜って、気絶した兵士の傍に落ちた軍用ナイフを拾った。一緒に落ちている銃には目もくれなかった。

欲しいのは命ではなく、彼自身だったから。

ロイエンタールもまた、完全に現在目の前にいる人間のみに集中し、関節部分とはいえ装甲服を殴り付けた左手に痛みを覚える余地は無かった。

理屈も、理由も無く、唯判っていた。……今勝てば！

互いに互いを手に出来る、そう考えていた。

この手に取り戻すことが出来る、そう、全てを！ ミッターマイヤーは今、俺しか見ていないのだから。

奸物どもにも、彼の両親にも渡さない、だって今、ロイエンタールは遥かな彼方ではなく、自分を見ているのだから。

切り結ぶ刃、重なり合う刹那の肉体、全身全霊を掛けた戦いは、唐突に終わらされた。

取り敢えず、いの一番に乗り込んだつもりであったシェーンコツプは、ロッカールームで繰り広げられる夢の対決に一瞬面喰らった。「ロイエンタール、お前の首は誰にもやらないっ！」「良く言った！」

知る者が見れば、それはまさに夢の対決だったろう。

「俺はお前に勝つ！」

二人同時にそう叫ぶ。その後続くのも同じ言葉だ。

「勝つて、俺の望みを適える！」

しかし。

「水！」

ミッターマイヤーには聞き覚えのある、ロイエンタールには始めて聞く声、そして二人の間を熱線銃の閃光が割って入った。

「シェーンコップ少将！」

左右に裂かれた双壁の内、ミッターマイヤーの方が口を開いた。

邪魔だと叫ぼうとしたロイエンタールの氣勢を制して、薔薇の猛者は言い放つ。

「オスカー・フォン・ロイエンタール提督。お楽しみのあるところを申し訳ないが、今貴方の身柄は、貴方のその瞳より稀少だね」

「邪魔をするか、犬！」

ロイエンタールへの返答は、薔薇の騎士連隊がなだれ込む事で示された。

その言葉に訝しみつつ、それでもミッターマイヤーは現在の味方である白兵戦の勇者達の前に立ちはだかろうとした。

その次の瞬間、ロッカールームは炸裂音と爆風に閉ざされた。

「！！？」

「閣下！ ロイエンタール閣下！」

それは、参謀長であるハンス・エドアルド・ベルゲングリューン中将の声だった。

部下の報告から、ロッカールームの異変に気付いた彼は、その上層の部屋から床をぶち抜き、救援隊を突入させたのである。

平時ならロイエンタールも即時対応出来たのであろうが、爆風に晒され、また彼一人装甲服を着ていなかった事が仇になった。

「ミッターマイアアッ！！」

「ロイエンタアルウ！」

瞬く間の乱戦によって、二人は再びもぎ離されたのである。

敵旗艦から切り離れた揚陸艦の中で、イゼルローン要塞防護司令官は蜂蜜色の髪の小柄な分艦隊指揮官を見つめる。

ミッターマイヤーの方は、神妙に見えるがその実、蹴りのつかなかった決闘への未練半分、捕まえられなかったロイエンタールへの未練半分で落ち込んでいたのだが。

「何でお前さんが、ここににいるのかはともかくとして……」

そう言って派手に溜息をついて見せるシェーンコップの向こうで、現薔薇の騎士連隊連隊長とその右腕とが笑い合う。

「いや、惜しい事をした。しかし向こうもいきなり天井落としかますとはな」

「向こうもやりますねえ」

十八番を取られたと、笑ったライナー・ブルームハルトはまだ項垂れているミッターマイヤーの肩を労わるように叩いた。

「ロイエンタール提督を捕まえていたら、一番手柄だったでしょうに。惜しかったですねえ」

「へ？」

暫しの沈黙。

それに向かつて、親切なライナー君は今回の作戦を簡単に話してくれた。

単に彼は確認事項を口にしたただだが、その直後に来たのは、艦内に響き渡る絶叫だった。

「お、俺はっ俺は俺は俺はーーーーーっ!!」

全てを知ったミッターマイヤーの反応に、ぽかんと彼を見つめる連隊員と、こらえ切れずに爆笑する元連隊長がそこにいた。

「申し訳ありません」

漸く聴覚の麻痺が取れた司令官に、揚陸艦を取り逃がした事を報告し、ベルゲングリューンは頭を下げた。

「別に卿の責任ではない」

そう、責任を問う声ではなかったが、金銀妖瞳の提督の声は地獄の底から響くようであった。

「俺が熱くなりすぎたのだ。少し、頭を冷やして出直すでしょう」  
氷点下、否絶対零度のその声に、キルヒアイス艦隊から転属して来た参謀長は文字通り凍り付くしかなかった。

こうして、双璧の千載一遇のチャンスは浪費され費え去ってしまった。

それは、「タイムトラベルが必ずしも都合の良い方へ転がるとは限らないと言う、一例なのかもしれないね」と、呟いた東洋人がフエザンにいたとか、いなかったとか。

「<sup>ヤン</sup>羅師父」

そう声を掛けた、ミルクチョコレート色の髪 of 青年に、眠そうな顔の占い師は少し困ったように頭を搔いて言った。

「師父は止めてくれないかな、ホルスト君」

「すみません」

そう言う帝国人の青年は、お茶の入った紙コップを指先で回しながらぼやいていた。

「どうにも嫌な感じがするんですよ」

「？」

「あの人、否あいつ、妙なところで熱くなって、ドジ踏むところあるから」

そう言って、また溜息を吐いた青年に、謎の占い師もうつんと頷き実存顔で付け足した。曰く、

「人は自分の性分からは逃げ切れないからねえ。」

その声が届いたのか、ミッターマイヤーの絶叫はまだ続いていた。

## 7・舟は漂う

帝国暦四八九年、宇宙暦七九八年一月九日、イゼルローン攻略軍の後詰として、キルヒアイス軍が出立。

しかし、一月一〇日、ジークフリード・キルヒアイス上級大將は全軍に、目的地がフェザーン回廊である事を公表した。

征路を行く事二週間、一月二四日に帝国軍の大艦隊はフェザーンに達したのである。

ホルスト・ジンツァーは天空を押し包むように展開される艦艇群を、万感の思いで見上げていた。

あの日、そう彼にとつての五年前の今日、ミッターマイヤー上級大將揮下の提督としてフェザーン制圧の一翼を担い、彼はここに乗り込んだのだから。

だが、その艦艇の中に真紅の旗艦を見出し、ジンツァーはゆつくりと踵を返した。

あそこにいるのは、彼を知らない彼の恩人である。

『この世界』では、ホルスト・ジンツァー中佐は輸送艦隊の事故で死亡していた。

彼が、ジークフリード・キルヒアイスに出会う筈だった、軽微で済んだ筈の流星群との接触事故は艦隊を半壊させるほどの大災害となっていた。

ホルスト・ジンツァー『上級大將』はあの日、一年前のシャトル墜落事故で亡くなった『ミッターマイヤー主席元帥』夫妻の墓参りに行っていた。

事故後ジンツァーは、指導者を失い混迷し迷走する帝国政府の建て直しそっちのけで、『テロリスト』搜索に奔走するかつての同僚達と対立した。

そして政局が落ち着いたのを見届け、軍を退役する事にした彼は、上官でありかつての同期である元帥にその報告をしに来ていたのだ。長く付いて来てくれた参謀長と副官、二人だけを伴っての墓参の帰り道、彼らの乗った地上車の目の前で何かを避けようとして横転したトレーラーと、それに弾かれた大型車が道を塞いだ。

そこから強い衝撃と共に彼らは『五年前』のフェザーンに投げ出された。

納得行かない事に、服装はそのままだが、五年前の肉体で。

そして今、彼らは雇われ航宙士として密やかに生活していた。

しかしその生活も、どうやらこれで終わりのようであった。

程無く、彼は何時もの大柄なアフリカ系民族の准尉と一緒に、人型の大荷物を抱えて途方にくれるヤン・ウェンリーの養子を見付けたからである。

帝国軍の大艦隊がフェザーンを武力制圧し、イゼルローンで未だ大規模な戦闘が繰り広げられている最中、同盟中央部では予想外の事態が引き起こされていた。

理由はまちまちであったが、首都星を挟んだイゼルローン、フェザーン方面の反対側で、大小様々な暴動事件が発生したのである。その鎮圧に、ウランフ・ボルド・ブルゲド率いる第一〇艦隊が差し向けられる事となったのだ。

「なぜ俺だ？ こう言うのはビュコックの爺さんが向きだろうにつ  
！」

首都からの通信後、そう叫んで床にベレー帽を叩き付けたウランフだったが、すぐに思考を切り替え秘密回線を開いた。

最初の計画から、若干の軌道修正を余儀なくされたからである。

「ほう、発想の転換かね？」

すったもんたの続く宇宙艦隊司令部の一角で、アレクサンドル・ビュコック大将と新任総参謀長のチュン・ウー・チェンの二人は、急遽ドサ回りが決まった第一〇艦隊の提督からの秘密通信を受けていた。

『そう、暴動騒ぎのお蔭で、最初のコルク栓プラグは使えなくなった。である以上、真つ当な方法では我々はギリ貧になるだけです』

そう言った騎馬民族の末裔は、モニターの中でふつと悪く笑った。『なるほど、ヤン提督に活躍して戴く訳ですな』

のほほんとそう応えた《パン屋の二代目》に向かつて、ちよい不良わどころでは無い親父は「その通り」と頷いた。

『どうせ、今残っている艦船をかき集めたところで、後二艦隊ひねり出せば御の字でしょう。しかも、練度も低ければ質も最悪。となった以上、こちらを主力などとおこがましい事を考えなければ良い。つまり、中央の艦隊は時間稼ぎの壁に徹し、大きく迂回してくる本隊を待つ事にすれば良い』

「上手く行くかのう？」

ご老公の疑問に、『頭が切れて凶悪な助さん』はそれこそチェシヤ猫のように笑った。

『なあに、年金の分働けと言ってやればいいんですよ、あのペテン師には』

「まあ、敵も味方も、イゼルローンは持ち運び出来ませんからな。

あそこを上手く使って、ヤン提督にはこちらに戻って戴きましょう』

『今、この国家の危機に際して、あそこを逃げ込み先にしようなんぞとふてえ事を考えるお偉方が出て来る前に、ヤンの奴には仕事して貰いましょうか』

《穏やかそうだが辛らつな二代目格さん》の言葉と、それに笑顔で応えるウランフの姿に、ビュコック大将の副官はげんなりと胃の辺りに手を当てていた。

ウォルフガング・ミッターマイヤーはその頃、黙々とルーチンワークに等しい出撃を繰り返していた。

年末のあの失敗を、未だに引きずる彼を艦隊のスタッフ達は容赦なく突っ突いてくれる。

「あーあ、前回の作戦成功してりやあ、もうちょつと楽だったかねえ？」

「わっかんないアルよ、意外に大将のどっちかが、ここでチャンスとばかりに大攻勢掛けて来たかもネ」

「まあ、どっちにしろ、今とは違うことになっていたって言うのは外せないよねえ」

アイリーン・サザランド准尉、チャン・リン曹長、デライラ・カーライト少尉の三人、通称『ベールオウルフのかしまし娘（命名ヤン・ウェンリー）』に、副長であるヘルガ・ミュンツァー少佐の氷のような一睨みが飛ぶ。

いくら入港中とは言え、どんな不測の事態が起きるか判らないからだ。

お嬢さん方の突っ込みにがっくりと頂垂れるミッターマイヤーに、すみませんと恐縮しつつ艦長手ずからコーヒーを差し出した。

おやと思いつつ受け取ったミッターマイヤーの傍に、通信機をいじっていたらしい若い副官が戻って来た。

「ミッターマイヤー提督、面倒な事になってきましたよ」

「どう言うことだい、ガウエイン」

司令部からの連絡を持って来たガウエインは、頬を掻きつつ顔に大きく「厄介だ」と書いてミッターマイヤーに報告を読み上げた。

同盟領内の暴動多発と言う知らせは、ミッターマイヤーにも驚きをもたらした。理由はもちろん、『前』には無かった事態だからだ。

生き残った人間が多いという事は、『前』には無かった事態が生じると言う事だろうか？

ミッターマイヤーの思いの向こう側で、ガウエインとマリエ・ローゼンバンク中佐とが会話を続ける。

二人は、一時期フェザーンのフラット（アパート）で隣同士だった時期があり、殆ど親類の甥っ子と年若い叔母さんの様な関係にある。

「ディアス、ゴメス、カーン、ヴェスプッチ、バルボア、そしてマゼラン。あら、全部商業惑星だわ？ 何でこんなところで」

「ええ、察するところ黒狐の悪あがきかなあって、俺は睨んでますけど。でも、今更ですよねえ、フェザーンはもう、帝国に武力制圧されちゃっているのに」

その言葉にはつとなる。ミッターマイヤーの脳裏を駆け抜けるシルヴァーベルヒ、ヤン、ルッツ、オーベルシュタイン、そしてロイエンタールの顔。地球教のテロによって、そして策謀によって亡くなった人々。

「ガウエイン、地球教とフェザーンは繋がりが深いのか！？」

それは質問と言うより詰問に近かったが、ガウエインは驚きつつも淀みなく頷いた。

「ええ、フェザーンは帝国と同盟、両方の信者が聖地巡礼のターミナルにしていますから。あそこに信者を送迎する事で、糊塗を凌ぐ自由商人だつて多いですし」

「ミッターマイヤー提督、まさかこの暴動を指示したのは地球教だと仰いますの？」

ローゼンバンク艦長の言葉に、思わず縦に振りそうになった首を慌てて止め、ミッターマイヤーは何か「確信はない」と言った。

だがそれに向かって、ガウエインが思い出したようにこう言った。周囲の耳には入らないように。

「ミッターマイヤー提督、『前にあつた』んですね、地球教絡みで」その言葉に、ミッターマイヤーは灰色の瞳を伏せ、小さく頷いた。それを見ていたローゼンバンク艦長の表情が強張り、ガウエインは跳ね上がるように叫んでいた。

「どうしてそれを先に言わないんですかっ！」

そしてガウエインは司令部に「報告する事がある」とだけ通信を入れると、入港後の細々した事を艦長と艦橋スタッフに任せて、ミッターマイヤーの手を引いて走り出した。

「が、ガウエイン、何が」

「良いですか、ミッターマイヤー提督、帝国よりずっと同盟の方が地球教徒は多い、判りますか？」

「え?!」

港湾エリアから司令部のあるフロアに向かうエレベータの前で、ガウエインは当然だと片眉を器用に上げて振り返った。

「同盟は共和制です。それは判っていますね？」

「あ、ああ」

「である以上、共和制では個人の自由と言う奴が帝国からは想像出来ないくらい多いんです。

その中には、当然宗教の自由もある。時の政府を批判するような活動をしないのであれば、どんな如何わしい宗派であろうと信者獲得の邪魔は出来ないんですよ！」

啞然とするミッターマイヤーに、いつそ酷薄に　　そう、とても懐かしい表情で　　ガウエインは笑った。

「そう、例えばテロリストの巣窟だろうと、宗教を名乗る以上は彼らの『自由』も保証するのが共和主義って奴ですから」

その言葉に、冷たいものが背を流れるのを感じつつ、だが同時にミッターマイヤーはある疑問を覚えてエレベータの中で年下の副官に向き直った。

「じゃあ、どうして奴らは同盟を潰そうとする、帝国やフェザーンに加担する？　帝国よりも信者が多いんだろう？」

「そうですね」

動いていく階数表示を目で追いながら、ガウエインは「よく判らない」と首を振った。

「同盟が潰れそうだからって、そんな簡単な訳じゃないとは思いま

すがね。……羅師父やんせんせいがいてくれたら、知恵を貸して貰えたかな？」  
「やん？」

訝しげに聞き返すミッターマイヤーに、ガウエインはにこりと普段の笑顔に戻ってこう言った。

「前に話したでしょう？ 仲良くしてくれた司書の先生。多分漢字表記が違うんだと思うんですけど、あの先生も『ヤン・ウエンリー』って言うんですよ」

その言葉と同時に、司令部エリアへの扉が開いた。

それと前後して、フェザーン。

ユリアン・ミンツはざっくりとしたセーターと、頭をかつぼり包む帽子とトンボの様な眼鏡を掛けて歩いていた。

その横には、穏和で理知的な二〇歳前後の青年が、やはり帽子を被って      こちらは、フェザーンのプロフライングボールリーグの人気チームのロゴ入りキャップだ      スタジアムジャンパー姿で歩いている。

この青年の名前は、アルフォンス・レーグナー。ホルスト・ジンツァーの部下と名乗り、市街地の様子を見たいと言った、ユリアンのボディ・ガードを買って出た人物である。

年齢的にも近く談笑していれば兄弟に見えなくもない事、そして彼の射撃と状況判断能力から、ジンツァーも許可したのである。

今、ユリアンはマシUNG准尉、ヘンスロー弁務官と共に市内のチャイナ地区と呼ばれる区画にある雑居ビルに身を寄せていた。

ジンツァーに匿われた後、ガウエインからのメモを頼りに逃げ込んだのが、ここにある『行雷大厦』（ハンロンマンション）と言う雑居ビルだったのである。

ここの住人のほぼ全員が、フェザーンの惑星警察組織の人間（何しろ家主からして元惑星警察警部だ）である。元々自治領主の『裏』を追い掛けていた上に、所謂マフィア達も一目も二目も置くと言う

彼らの元に居着いてからは、それなりに安全を確保していた。

「思ったより、平静ですね」

ユリアンの囁きに、アルフォンスはくすりと微笑んだ。

「キルヒアイス卿の薫陶だろうね。尤も、ついこの間、たがを外した兵士が婦女暴行をやらかしたとかで、公開処刑されていたよ。馬鹿な奴らだ。あの方だって、兵士が意味無く平民に暴力を振るう事を許される筈が無いのに」

後半は、特にユリアンに聞かせるとか、そう言つつもりでは無かったようだ。

だが、その弦きは周囲に気を配るユリアンの耳には届かなかった。

## 7・舟は漂う（後書き）

惑星名、地区名は、自分設定です。

原作に無い部分を補う為に付けていますので、「原作に無い」と言う指摘は結構です。

判ってて書いてんだよ？

ウランフさんの名前は、当時の役場の人間が、間違えて所謂幼名をFIRSTNAME、MIDDLENAMEとして登録してしまったので、書類上こう書かなきゃなくなっていると言う裏設定を作っていたんですが、裏なのでその辺書けなかった為原作に無いって書かれてると指摘されてしまいました。

## 8・何日君再来（いつのひかまたきみくる）

司令部の通信室で、どんな会話がなされたかは定かでない。

しかし、その会話の後ヤン・ウェンリー司令官は明確な方針を幕僚達に示した。即ち、『イゼルローン要塞の放棄』である。

ヤンとシェーンコップ要塞防護指揮官の会話に、ウォルフガング・ミッターマイヤーは思わずこけそうになった。

「必要なものを必要な間だけ借りた。必要なくなったから返す、それだけの事さ」

「また必要になったら？」

「また借りるさ。その間帝国に預かって貰う。まあ、利子が付かないのが残念だけど」

「要塞とか人妻つてものは、簡単に借りられないものですがね」

二人の会話の、余りの強烈さについて頭を抱えていたミッターマイヤーは、だからヤンのもっと酷い言葉を聞き落とした。

「相手はロイエンタールだ。『ヴェスターラントの英雄』だ。引つ掛けがいがあると言うものさ」

その頃、オスカー・フォン・ロイエンタール上級大將は攻撃許可を申請する艦隊司令官に、些か閉口気味であった。

ヘルムート・レンネンキャンプ大將は決して無能ではなかったが、とにかく目の前の戦場での完全勝利に固執する嫌いがあり、その性質を持って、ロイエンタールは彼を『戦争屋』と断じていた。

「力ずくの攻撃は無益だ」

総司令官の言葉に、レンネンキャンプは大いに不満であった。

既にフェザーンは武力占拠が終わり、先陣は叛乱軍領に進攻を始めていた。このまま、イゼルローンを包囲して遅々として動かないという事態になれば、フェザーン側の味方ばかりが戦功を上げ

る事となる。

ならばせめて、イゼルローンを奪取するなり撃破するなりしてあの『ペテン師』を撃破せねば面目が立たない、と言うのが彼の言い分であつた。

それに対して、ロイエンタールはヤン・ウエンリーがイゼルローンを放棄する可能性を示唆するのだが、レンネンキャンプは全くそれを受け入れようとはしなかった。

「同盟が滅びてもイゼルローンが不落であれば、ヤンの武人としての矜持は保たれるではないか」

「ああ、ヤンが卿ならそう思うだろうよ」

髭を震わせて言つてのけた年長の部下に、ロイエンタールは侮辱以上に嫌悪をまぶして、冷然と言いつた。戦争屋としての視野の狭さも然る事ながら、今敵対する黒髪の敵將を過小評価するレンネンキャンプに、ロイエンタールは言い様の無い嫌悪を感じていた。

……それは、ヤンに従う親友への侮辱と、彼は捉えていたのである。

「レンネンキャンプ提督、できれば私も要塞に大攻勢を掛けたいと思う。しかし総司令官殿が否と仰る以上、従うのが筋と言うものである」

頭から湯気を立てている年上の僚友を宥めるのは、すっかりコルネリアス・ルッツの役目となっていた。彼としてもやりたい訳ではないが、結果として彼に回つて来ているのである。

仲裁役への礼儀として、ロイエンタールは取り敢えず矛先を収めた。尤も、金銀妖瞳から表情は消えていたが。

取り敢えず、目下の仕事としてロイエンタールは所謂、「嫌がらせの攻撃」を始めたのである。

結果として、イゼルローン側の忙しさは筆舌に尽くしがたいものと化した。

何しろ、要塞からの撤退準備、民間人の避難とを同時にこなさねばならない上に、煩く突っ掛かって来る敵を受け流さねばならないのだ。

「超過勤務は、俺の主義に反するんだ」

そう言ったのは、度重なる出撃から戻って来た第一空戦隊隊長のオリビエ・ポプランである。

食堂に入るなり、初期の社会主義者よろしくテーブルを叩いてこっぴどく喚いていた。

「ハインセンに戻れたら、絶対パイロットの組合を創ってやる！兵士の過重労働を無くす為に、生涯を掛けてやるからな、見てろよ管理者どもめ！！」

「お前さんは、女に人生掛けてるんじゃないのか？」

突っ込むのは、第二空戦隊長のイワン・コーネフである。

撃墜王二人の掛け合いを眺めつつも、ガウエイン・クラスター少尉は猛然と食事を掻き込んでいた。

つい先程出撃命令が出た為で、取り敢えず固形物を一通り胃に詰め込むと、アルカリ飲料のパックを掴んでガウエインは《ベーオウルフ》の納まっているドックへと走り出した。

「あ、ガウエイン、あんたもこれから？」

最初にその声を掛けてきたのは、《ベーオウルフ》ブリッジクルー 艦橋要員第二

グループの女性士官<sup>ウェーブ</sup>達である。ミリー・ヤンセン准尉、ミランダ・ウォーター曹長、クワン・ヒョンフォン軍曹と言った面々が、アイリーンやリン、デライラ達のグループと待ち回りで艦橋に詰めているのだ。

「ねえ、アッテンボロー提督との協同作戦って本当？」

「うん、アッテンボロー提督が提出して、ヤン司令官の添削付き！」  
空になった飲料パックを、離れたダストシュートに投げ込みながらの応えに、ウェーブ達の間には笑い弾けた。

「そりゃあいいわ、楽勝って奴じゃない」

「取り敢えず一仕事しましょうか」

キャラキヤラと持ち場に向かうウェーブ達と共に、ガウエインは《ベーオウルフ》へと乗り込んだ。彼らの役目は、「送り狼を横合いから殴り付ける事」、であった。

艦橋にガウエインが上がって来ると、既に艦橋に入っていたミッターマイヤーがローゼンバンク艦長から受け取った書類に目を通して、いる最中であつた。

「すみません、遅くなりました！」

「気にしないでいい」

恐縮する若い副官に笑い掛け、ミッターマイヤーはメインスクリーンに目をやった。

「ところで、ガウエインは撤退準備は進んでいるのか？」

「元々、身一つで来たようなものですから、鞆を閉じてしまえばって言いたいところですけど、うっかり増やしてしまった雑誌や本の荷造りにえらい事になってます。最悪、読み掛けと未読だけ持つて、雑誌と読んだ本は置いて行く事になりそうです」

そう言つて舌を出したガウエインに、ミッターマイヤーは小さく苦笑した。

「うちは、フェリックスがな」

「フェリックス君が？」

「ああ、『熊ちゃんと一緒じゃなきゃ、ヤダ』って」

今、ミッターマイヤー一家が使っている官舎の子供部屋には、愛らしい薄茶のデディ・ベアの壁紙が張つてある。こちらに着て間もない頃に、『薔薇の騎士』（ローゼンリッター）連隊のライナー・ブルームハルト大尉がわざわざフェリックスの為に張ったものである。

元々、ブルームハルトはカスパー・リンツ共々、一家が亡命して来て所謂公営住宅（身一つで転がり込んだ亡命者用の、かなり質の悪い代物である）に腰を落着けた時に、不慣れな彼らに家族ぐるみで手を差し伸べてくれた人間である。

当然ながら、フェリックスにとつても彼らは年の離れた兄、又は

年若い叔父さんみたいな存在である。

そんな彼らからの贈り物であるデディ・ベアの壁紙を残して行かねばならない、その事実にはフェリックスはすっかり臍を曲げているのである。また、渋っているのは彼の妻も同様である（因みに、そんな奥様方の集まりの中心には、キャゼルヌ夫人が居るとか居ないとか）。

「仕方ありませんねえ、此処は『俺達の家』ですもの」

ガウエインの言葉に小さく微笑み、ミッターマイヤーは出撃命令を出した。

囿として、アッテンボロー分艦隊が護衛する輸送艦五〇〇隻に、引つ掛かったのはレンネンキャンプ艦隊であった。

「レンネンキャンプか」

画面を見ているミッターマイヤーの目に、かなり剣呑な色が浮かぶ。

『前』の時には、色々『害悪』を振り撒いてくれた男である。僚友としては、まあ中くらいと言った感じではある。

しかし、事ヤン・ウェンリーに対する態度は軍人としても、また公人としてもとても褒められた男ではなかった。あの『時』、レンネンキャンプが皇帝陛下の言葉を遵守していれば、ヤン・ウェンリーはもう暫くは大人しくハインセンに居た筈であつたし、あの後の戦闘や動乱は起きなかったかもしれない。

百歩譲って、結局ヤン・ウェンリーが行動を起こしていたとしても、もっと違う結果になっていただろう。

ふと、ミッターマイヤーは強い誘惑に駆られた。

レンネンキャンプ

今、彼は明確に『敵』である。今ここで『ガルガ・ファルムル』を落としてしまえば……。

「提督、何考えてらっしゃいます？」

「え？」

顔を上げると、ガウエインが呆れたように自分を見ている。

「今、すっごく悪い顔してましたよ？ ミスター・レンネンに何か含みでもあるんですか？」

そう言われて、ミッターマイヤーは頬に血が上るのを感じた。

そこへ、オペレーターから敵艦隊の接近が告げられた。ミッターマイヤーは頭の中の誘惑を振り切って、分艦隊に攻撃を命じた。

レンネンキャンプは、挟撃の為に艦隊を二分し、緩やかに曲線を描いて輸送艦隊を包囲しようとした。

一旦はロイエンタールを感嘆させたものの、前方に回り込もうとした側は自爆した輸送艦に巻き込まれ、混乱したところを護衛としてくっ付いていたアッテンボロー分艦隊に、そして後方から追いつがろうとした側に至っては、流体金属層の下で息を潜めていたミッターマイヤー分艦隊によって、強かどころかかなりの痛撃を食らった。

結果として、ルッツ艦隊の救援を受けて体勢を取り戻す頃には、レンネンキャンプ艦隊は半数以下に撃ち減らされたのである。

因みに、《ガルガ・ファルムル》は中破したものの生き残り、それを知って無意識のうちに舌打ちしたミッターマイヤーが居たのだが、それは艦橋でも限られた人間しか知らないことである。

そして、アレックス・キャゼルヌ命名《箱舟作戦》は、粛々と実行に移された。

《ベーオウルフ》は、乗員の七割以上が女性である事もあり、民間人女性達が多数搭乗する事となった。

六百人の赤ちゃんとその母親達を乗せた《ユリシーズ》よりはマシであると、《ベーオウルフ》の数少ない男性乗組員達は胸を撫で下ろしたらしい。

遠ざかる銀色の球体を眺めていたヤン艦隊の幹部達は、所定の時刻になつてもひび割れぬその美しい姿に、誰とも無く安堵の息を吐いていた。

「さらば、イゼルローン。俺が戻つて来るまで浮気するなよ。お前は本当に虚空の女王だ。お前ほど佳<sup>い</sup>い女はいなかった」

そう言つて別れを惜しむポプランや、ポケットウイスキーのボトルを掲げるシェーンコップ、そして敬礼して遠ざかる要塞を見詰める人々の中、ミッターマイヤーは一人別の思いを噛み締めていた。

ロイエンタール。

俺は、お前を護る。

今度こそ。

その頃、奪還したイゼルローン要塞に入港したロイエンタールの許に、一葉のカードが届けられた。

それは、爆発物の調査中に艦隊事務室の一角から発見されたもので、ロイエンタール個人に宛てたものであった。

受け取り、その文面を見たロイエンタールは、黙つて届けに来た士官を下がらせ、そしてそのカードを丁寧に軍服の胸ポケットに納めた。カードの文字は、他でもないミッターマイヤーの文字だった。

D u R e u e n t h a l ,

H o f f e n t l i c h   s e h e n   w i r  
u n s   w i e d e r .

W . M

「次は、同盟領で、だな。ミッターマイヤー」

そう呟き、ロイエンタールは帝都へ『イゼルローン奪還』を知らせるよう命じた。

かくして帝国暦四九〇年、宇宙暦七九九年一月一九日、イゼルローンは帝国軍に占拠された。

そしてミッターマイヤーの、『終わらせない為の戦い』の第二幕の始まりでもあった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2383p/>

---

永遠は刹那のなかに 第四部

2011年4月15日13時33分発行